

行動ファイナンスと金融リテラシー

大庭 昭彦 CMA

目 次

- | | |
|-----------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 4. 最適ポートフォリオと「リスク回避度」 |
| 2. 金融リテラシーと金融行動 | 5. 安全についての誤解 |
| 3. 行動ファイナンスの現在 | 6. 終わりに |

金融リテラシーは「長期分散投資をすること」、「無駄なお金を借りないこと」などの個人の適切な投資行動を促す面がある一方で、多くの人にとってはそれだけでは足りないことがある。知識があっても行動に結び付かないのである。解決には、行動ファイナンスで研究されている多くのバイアスの存在を認め、感情に基づく短期的で非合理的な判断（投げ売りなど）を抑制し、合理的な判断を促すことが必要とされる。特にリスク回避度を具体化する技術であるゴールベースの考え方や、安全について誤解しないことは重要である。行動ファイナンスが金融リテラシーの一般への浸透とその有効活用に役立っていくことが期待される。

1. はじめに

2017年10月9日に米国シカゴ大学のリチャード・セイラー教授がノーベル経済学賞を受けることが発表された。セイラーの授賞理由は「行動ファイナンスの分野での貢献に対して」ということである。行動ファイナンスでのノーベル賞の受賞としては、02年のダニエル・カーネマンや13年のロバート・シラーに続くものである。カーネマンは人の非合理的な意思決定をプロスペクトセオリ

ーという形でモデル化した。シラーはバブルや暴落の研究を行った。セイラーは、自然には人はどのような行動をとりやすいかという従来の行動ファイナンスの研究の延長として、どのようにルールをデザインすれば結果的に合理的な行動をとりやすいかという研究を進めた。こうした技術は一般に「ナッジ」と呼ばれている。ナッジとは「(注意を促すために) ヒジでそっと突く」という意味の英語だが、行動ファイナンスの分野では、分析に基づいて、直接的・強制的な方法によらずに、



大庭 昭彦 (おおば あきひこ)

1991年東京大学大学院計数工学専攻修士課程修了、同年野村総合研究所入社。野村ローゼンバーグI.T.I (サンフランシスコ) などを経て98年に野村証券金融経済研究所に転籍。現在は野村証券 金融工学研究センター エグゼクティブディレクター。2006～10年までアクサ・ローゼンバーグ証券投信投資顧問(株)社外取締役。主な著書に『行動ファイナンスで読み解く投資の科学―“お金は感情で動く”は本当か―』(東洋経済新報社、09年)がある。